

「ピューリタンの共同体」としての 17世紀ニュー・イングランド社会

薙 澤 梓

はじめに

多文化社会と評されるアメリカ社会において、宗教はどのような役割を果たしてきたのだろうか。2001年に起こったアメリカの同時多発テロに際しては、ブッシュ大統領は神の名の下にイラクとの戦争に突入することを正当化した。大統領の用いたこの「神」という言葉は、アメリカの社会学者ロバート・N・ベラーが「アメリカの市民宗教」と定義したもので、特定の宗教の神を指し示すものではない。しかし、この「神」という言葉はアメリカ国民に共通の感情を呼び起こし、彼らにひとつの共同体の一員であるということを確認させるものである。

周知の通り、アメリカ社会は多くの異なる人種・民族により成り立っている。それは1620年のピルグリム・ファーザーズのプリマス上陸以来、イギリスをはじめ世界各国から言葉や宗教、生活習慣のまったく異なる多くの移民が流入し続けているからである。しかし、ピルグリム・ファーザーズをはじめ、最初にアメリカに入植したのはピューリタンであり、歴史的に見ても彼らが現在のアメリカ社会の原型をつくったことは明らかである。このため、宗教は初めからアメリカ社会と密接に結びついたものであり、植民地建設当時から国民を統合するために用いられていたと考えられる。

また、アメリカ社会において、国民をひとつにまとめあげるために宗教が利用されてきたのは、あらゆる相違を超えて、同じ宗教を信じるものに共通性を与え、強い連帯感を起こさせるという性格を持っているためである¹。した

¹ 蓮見博昭『宗教に揺れるアメリカ』（日本評論社、2002）、p. 5.

がって、文化的背景が異なる人々の集りであっても、宗教によって彼らは「アメリカ人」というひとつの国の国民としてのアイデンティティーを持つことができるのである。

ところで、「アメリカ史における最初の明白なアメリカ人」²と評されているのは、17世紀後半のニュー・イングランドの教会の中心人物であったコットン・マザーである。彼が「最初のアメリカ人」であるということは、アメリカ社会と宗教との結びつきの観点からみると非常に興味深い。本稿では当時の社会的状況とそれに対する彼の態度から、17世紀後半における、共同体としてのアメリカ社会と宗教の関連性を考察したい。

1. 17世紀のニュー・イングランド

17世紀のニュー・イングランドのピューリタニズムについて述べる前に、まずピューリタンがアメリカ大陸へ渡ってきた背景を知る必要があるだろう。

ピューリタニズムとは、16世紀半ばに英国国教会の堕落した姿に失望し、聖書に基づく純粋なキリスト教の信仰をもとめた人々の思想である。当時の英国国教会は、カトリックのような形式的な儀式を重んじる傾向にあり、これに反対する立場にあったピューリタンたちはイギリスで迫害され、信仰の自由が認められていたオランダに移住した。しかしオランダの寛容な風潮は、彼らにとっては宗教の自由とはかけ離れた堕落したものと感じられたため、ピューリタンは真の信仰を求めて大西洋の向こうの新大陸へ渡る決心をしたのである³。例をあげると、1620年にはピルグリム・ファーザーズ (Pilgrim Fathers)、1630年には、後にニュー・イングランドの初代総督となるジョン・ウインスロップ

² Kenneth Silverman, *The Life and Times of Cotton Mather* (New York: Harper & Row, 1984), p. 423. John Canup, *Out of the Wilderness* (Connecticut: Wesleyan University Press, 1990), p. 198.

³ Cotton Mather, *Magnalia Christi Americana*, Book III, p. 53には、イングランド生まれの牧師ジョン・ダヴェンポート (John Davenport) (1597-1670) がオランダに移住したときの様子が述べられおり、彼は自分がオランダへ行ったのは、「オランダで行われている無差別な洗礼を見てくるよう神に遣わされたから」と述べている。

(John Winthrop) (1588-1649) 率いるピューリタンがアメリカへ渡った。

ウインスロップは大西洋上のアーベラ号で『キリスト教慈愛の雛形』(*A Model of Christian Charity*) という説教を行った。ここで彼は自分たちを聖書に登場する「丘の上の町」にたとえ、世界の目が自分たちに注がれている⁴とし、信仰に基づいた共同体をつくることを宣言したのだった。それゆえ、ウインスロップは旧約聖書に登場するユダヤの指導者ネヘミヤやモーセになぞらえられているのである⁵。

ピューリタンは彼の説教に基づいた新しい神の国をつくるため、「目に見える聖人」(Visible Saints) による純粋な教会の設立をもとめていた。よって、教会の会員になるためには厳格な審査が必要であり、教会の会衆をまえに、自分がいかに神から救済されたかという回心体験の告白をし、牧師と会衆に認められなければならなかった。また、教会員でない者は公民ではなく、政治体制に入ることは許されていなかった。この点がニュー・イングランド社会の最大の特質であるため、ニュー・イングランドの政治体制は神権政治と呼ばれている。

しかし、ウインスロップが目指したような信仰に基づいた共同体の実現は、早くも1640年代には実現されがたいものとなっていた。当時ボストンに住んでいた家族のうち、約4分の1の家庭の両親が非教会員であったため、そのような親を持つ子供には洗礼を授けることができなかつたのである⁶。さらに移民の増加に伴い、非教会員の割合は年を追うごとに多くなっていく。

そしてニュー・イングランドで生まれた世代が台頭する時代、つまり17世紀後半になると、このことが「目に見える聖人」の教会にとって大きな問題となった。これまでピューリタンの教えに基づいた信仰深い生活を営んでいた社会にも、世俗化の傾向が見られるようになり、礼拝中の居眠りや安息日の無視、飲酒、服装の乱れ、長髪、子供の夜遊びといった問題が繰り返し取り上げられる

⁴ Miller, Perry, ed., *The American Puritans, Their Prose and Poetry* (New York: Doubleday Anchor Books, Doubleday & Company, Inc., 1956), p. 83.

⁵ Mather, *Magnalia Christi Americana*, Book II, pp. 8-9.

⁶ Everett Emerson, *Puritanism in America, 1620-1750* (Boston: Twayne Publishers, 1977), p. 55.

ようになっていた。これと同時に、教会員になることは名誉なことであった一方、献金や政治参加など、教会員になることで生じる責任を負いたがらない者も出てきた。また、いつまでも回心経験をもてない信者の増加やさらなる移民の増加によって、教会員として認められた信者の割合は年々減少の一途をたどり⁷、そのため教会の社会的地位は弱まる傾向を示していた。

教会員の減少をくい止め、教会の弱体化を解決するために、1662年に教会会議が開催された。この会議では、いかに教会の純粹性を保ちながら教会員の数を増大させるかということが争点となり、多くの反対意見にもかかわらず「中途契約」制度（Half-way Covenant）が採用された。この制度により、教会員でない両親を持つ子供にも幼児洗礼が授けられ、回心の経験がない人でも、教会の用意した「契約文」⁸に合意することで教会の「中途会員」になれるようになった。しかし、教会の純粹性を保持するために、重要な儀式である聖餐式に加わることができたのは、回心体験を告白したうえで正式に教会員として認められた人物だけであった。

このように、当時のニュー・イングランドは教会の世俗化という、彼らにとっての「墮落」への道を進んでいた。このことは、人々の信仰心が薄れたということを表し、かつてニュー・イングランドの人々の生活のよりどころであった教会の地位低下と結びついている。また、世俗化や教会員の減少に伴う教会の地位低下がニュー・イングランドの聖職者たちにとってどれほど切実な問題であったかということは、中途契約制度が導入されたことから明らかだろう。さらに、ニュー・イングランドの世俗化という問題を解決するため、1679年には「宗教改革教会会議」が開かれた。この会議の目的は、主がニュー・イングランドに罰をあたえるほど神を挑発した諸悪とは何か、そしてその諸悪を改革

⁷ 岡田泰男編『アメリカ地域発展史』（有斐閣、1988）によると、ニュー・イングランドのマサチューセッツ植民地の人口は、1640年には8,932人であったが、教会員の減少が問題視されはじめた1660年には20,082人ふくれ上がっていた。また、移民の中には信仰の自由を求めた者だけでなく、奉公人や豊富な自然資源を求めていた者など、ピューリタンの信仰に無関心な者も多く見られた。

⁸ 大西直樹『ニューイングランドの宗教と社会』（彩流社、1997）によると、契約文の内容は、キリスト教の信仰を続けるということを表明するものだった。

するために何をなすべきかを議論することであり、社会改善のためにどのような政策をすべきかの決議がなされた。しかし、こういった教会側の努力にもかかわらず、ニュー・イングランドの墮落は時代を追うごとに進んでいくのである。

2. コットン・マザーと『マグナリア・クリスティ・アメリカーナ』

徐々に世俗化のすすむ17世紀のニュー・イングランドでも、なんとか人々の敬虔さを取り戻そうと闘っていた牧師の一族がいた。その一族は「マザー王朝」と呼ばれ、初代のリチャード・マザー (Richard Mather) (1595-1669) が1635年にアメリカに渡って以来、子のインクリース・マザー (Increase Mather) (1639-1723)、孫のコットン・マザー (Cotton Mather) (1663-1728) と、3代にわたって当時のアメリカにおける教会寡頭政治の中心的立場に立っていた。そのなかでも3代目のコットン・マザーは、ピューリタンの牧師の中で最も偉大な人物の1人とされる。

コットン・マザーに関する研究は、これまで文学史・思想史・宗教史・社会史などのさまざまな観点から多くのアプローチがなされており、教会だけでなくニュー・イングランド社会全体における指導的立場や公私問わず信仰熱心な一面から、彼が頑固で偏狭な人物であったというような印象を読み手にたびたび与えてきた。たとえば1692年にセイラムでおこった魔女裁判との関わりを扱った研究では、ニュー・イングランドを悪魔から守るために積極的に魔女の処刑にたずさわっていたようなイメージで描かれており⁹、彼が魔女裁判の中心人物であったという認識はいまだ根強い¹⁰。しかしそのような位置づけをされている一方で、もう1つのコットン・マザー像が描き出されている。それは、彼が世俗化の傾向にあった当時のニュー・イングランドの社会や教会を嘆き、

⁹ たとえば、森島恒雄『魔女狩り』(岩波新書, 1970) p. 184では、魔女狩りに対して「直接的な重大責任を負わねばならぬ」と述べられている。

¹⁰ Miller, *The New England Mind: from Colony to Province*, p.191. マリオン L. スターキー, 市場泰男訳『少女たちの魔女狩り マサチューセッツの冤罪事件』(平凡社, 1994), p. 346.

植民地建設当初のような共同体に戻すために必死に闘っていたにもかかわらず、同時代の人々からは非難されていた姿である。

コットン・マザーは中途契約制度が導入された1662年の翌年に生まれている。これは、彼が生まれる以前に、ニュー・イングランドの人々の心が教会から離れてしまっているということが、すでに植民地社会全体にとっての大きな問題として取り上げられていたということを示している。さらに彼は、中途契約制度導入の是非を問う教会会議では教会の純粋性を保持するために中途契約制度に反対し、1679年に開催された「宗教改革教会会議」では中心人物として会議をまとめあげたインクリース・マザーを父に持つ。コットン・マザーは幼い頃から、父をはじめ、多くの牧師が説教するのを聴いたり、祈りを捧げたりしている姿を目にし¹¹、自分も同じように熱心に神に祈り、いつしか父親のような牧師になることを志すようになっていった¹²。つまり、人々の墮落がすでに表面化している社会において、彼はピューリタンの教えに従って入植以来敬虔な生活を送っている家族の中で育ったのである。これらのことから、彼がニュー・イングランドの教会をとりまく世俗化の波とそれに対抗する聖職者たちの間に大きな隔たりを感じ、純粋な教会を保持する動きに傾倒していったというのは、想像に難くない。

コットン・マザーが偉大な牧師とされているのは、彼が「マザー王朝」の一員であり、母方の祖父もニュー・イングランド建設時代の主要な牧師の1人、ジョン・コットン (John Cotton) (1584-1652) であるという血筋による理由だけではない。彼は生涯で450もの著作物や説教を著しており、代表作『マグナリア・クリスティ・アメリカーナ』 (*Magnalia Christi Americana*) (1702) はアメリカ文学史上重要な作品のひとつに数えられている。この作品は7巻にのぼるニュー・イングランドの教会史で、1620年から1698年までの時代を扱っており、これを含む多くの作品や説教の中で、彼は教会の世俗化を背景に、ニュー・イングランドの人々の信仰心が薄れていくことを嘆いている。

¹¹ Silverman, *The Life and Times of Cotton Mather*, p. 13, p. 19.

¹² *Ibid.*, p.29.

彼は17世紀後半のニュー・イングランドの人々は墮落しているととらえ、「今やこの改革された教会は約40年のあいだに常軌を逸した教会になってしまった」¹³と述べている。つまりニュー・イングランドは世俗化が進んでしまったため、もはや純粋な信仰の場ではなくなりつつあるということである。その一方で、コットン・マザーが植民地が設立されたばかりの時代を「黄金時代」¹⁴とみなしていることから、多くの研究者が指摘しているように、彼はもう一度植民地建設当初のような敬虔なピューリタニズムの精神に基づいた共同体に戻ることを切望していたと考えられる¹⁵。

それでは、彼は『マグナリア』のなかで、ニュー・イングランドを植民地が建設されたばかりの頃のような姿に戻すために、具体的にどのようなことをすべきと考えていたのだろうか。

ここで特に注目したいのが、『マグナリア』のなかで彼が伝記に費やしているページの割合である。第2巻では歴代の総督、第3巻では指導的立場にあった牧師、そして第4巻ではハーヴァード大学の卒業生について記され、7巻全体の半分以上のページが伝記で占められている。とくに初期のニュー・イングランドの植民地において指導的立場にあった牧師たちの伝記を扱った第3巻は、全7巻のなかで最もページ数の多いものとなっており、それぞれの牧師の生い立ちや回心体験、本国からニュー・イングランドへ旅立った背景、説教の内容などを中心に、50人ほどの牧師の人生が振り返られている。植民地建設に直接たずさわった人物が高く評価され¹⁶、全体の半分以上のページを彼らの伝記に費やしているということが示しているのは、コットン・マザーが「黄金時代」に戻るために先人たちの人生を学ぶことをいかに重視していたかということではないだろうか。それは第3巻の序文で以下のように述べられていることから

¹³ Mather, *Magnalia Christi Americana*, Book III, p. 11.

¹⁴ Mather, *Magnalia Christi Americana*, Book I, General Introduction.

¹⁵ 向井照彦『ウィルダネス研究序説』(英宝社, 1995), p.254. Canup, *Out of the Wilderness*, p. 78. Emerson, *Puritanism in America, 1620-1750*, p. 146 など。

¹⁶ Emerson, *Puritanism in America, 1620-1750*, p. 146では、とくに高く評価されている人物として、ウインスロップやジョン・ウインスロップJr. (John Winthrop Jr.), ピルグリム・ファーザーズのウィリアム・ブラッドフォード (William Bradford) の例が挙げられている。

も明らかである。

And now, by introducing the Fathers of New-England, without the least Fiction, or Figure of Rhetorick, I hope the plain History of their Lives, will be a powerful way of propounding their Fatherly Counsels to their Posterity. A stroke with the Hand of a dead Man, has before now been a Remedy for a Malady not easily remedied¹⁷.

そして今、ニュー・イングランドの父たちを、最小のうそや大げさな表現による姿を用いずに紹介することで、飾らない彼らの人生の物語が、子孫に対して父親らしい助言を提示するための強力な方法となることを願う。亡くなった人物の手による一撃が、これまで簡単に治されなかった病に対する救済法なのである。

それでは、コットン・マザーが「簡単に救済されなかった病に対する救済法」と表現しているものから、彼らの人生を学んで「黄金時代」を復活させるための方法はどのようなものだったのかを考える。まず、ニュー・イングランド社会が抱える「病」を一言で表現すれば「墮落」ということになり、その病を治すための「救済法」とはニュー・イングランドの父たちの人生を振り返ることである。しかし、振り返るだけで再び「黄金時代」が訪れるはずもない。彼がニュー・イングランドのモーセと評する初代総督ウインスロップの伝記において、コットン・マザーは彼を「非常に模倣するに値する人物であると推薦」し、その理由として、ウインスロップが非常に信仰熱心であったことをあげている¹⁸。

以上のことから、コットン・マザーが『マグナリア』で主張していることが見えてくる。それは、ニュー・イングランド社会の墮落は人々が敬虔ではなくなったことと結びついていること、そして墮落をくい止めるためにはニュー・イングランドの偉人たちを見習うことが必要だということである。

¹⁷ Mather, *Magnalia Christi Americana*, Book III, p. 1.

¹⁸ Mather, *Magnalia Christi Americana*, Book II, p. 9.

3. 罪の意識と悔い改め

『マグナリア』ではいたるところで「墮落」という表現 (Degeneracy, Declension, Corruptionなど) が用いられている。この「墮落」という言葉は、しばしば17世紀後半の「ニュー・イングランド」や「教会」と一緒に用いられている一方、「ヨーロッパ」や「イングランドの教会」という言葉と結び付けられていることもある¹⁹。しかし、植民地が設立された当時の事柄について述べられている箇所では、「墮落」と「ニュー・イングランド」あるいは「教会」という言葉は結び付けられていない。彼が植民地が設立されたばかりの時代を「黄金時代」とみなしていることから、植民地建設当初のニュー・イングランドには、17世紀前半のヨーロッパにも17世紀後半のニュー・イングランドにも見られない特質があったと考えられる。

ピューリタンたちがアメリカへ渡るきっかけとなったのは、第1章で述べたように英国国教会の墮落した姿であり、聖書に基づいた純粋なキリスト教を信仰する新しい共同体をつくりたいという彼らの強い信念であった。そして、その信念はウインスロップが1630年に行った説教『キリスト教慈愛の雛形』のなかで次のように述べられている。

The end is to improve our lives to more service to the Lord, the comfort and increase of the body of Christ whereof we are members, that ourselves and posterity may be the better preserved from the common corruption of the evil world, to serve the Lord and workout our salvation under the power and purity of His holy ordinances.

¹⁹ たとえば、17世紀後半のニュー・イングランドの教会の墮落について “I saw a fearful *Degeneracy*, creeping, I cannot say, but rushing in upon these Churches” (Book III, p. 11) と述べている。また、ヨーロッパについては “the *Depravations of Europe*” (Book I, General Introduction) と表現されている。

われわれの目的は、主に対して、よりいっそう奉仕し、私たちが一員として連なっているキリストの体に、安らぎと栄が加えられるよう、わたしたちの生活を向上させることである。それによって、わたしたちと子孫らが、この世の腐敗からいっそう守られ、神の聖なる掟の力と潔さのもとで、主に使え、救いを全うするためである。²⁰

主のために生活を向上させることによって、この世の腐敗から守られるという点と、その約60年後にコットン・マザーがニュー・イングランドの墮落について嘆いている点を併せて考えると、彼にとっての「黄金時代」の特質と、17世紀後半のニュー・イングランドの「墮落」の原因が見えてくる。

まず「黄金時代」の特質とは、ウインスロップの説教に厳格に従って、新しい神の国の建設のために主に奉仕し、一人一人が生活向上に取り組んでいたことだと考えられる。そして「墮落」の原因とは、人々が主に奉仕しなくなったことと結びついている。つまりコットン・マザーにとって「墮落」とは、人々が主のために生活を向上させていない結果もたらされたものなのである。一方で彼は『マグナリア・クリスティー・アメリカーナ』のなかで、「主に対して、よりいっそう奉仕」する人物を「忠実なしもべ」(Faithful Servant)という言葉で表現している。

ここで、前章で触れたようにコットン・マザーが「簡単に救済されなかった病に対する救済法」と表現しているものについて再び考えたい。ニュー・イングランドの社会が抱える「病」が墮落であり、この病を治すための「救済法」は、ニュー・イングランドの植民地建設にたずさわった人物の人生を見て学ぶことであるということはすでに述べた。この「病」と「救済法」という言葉に着目して、『マグナリア』に見られるコットン・マザーのピューリタニズムを考察する。

まず、墮落という「病」については先程触れたように、ニュー・イングランドの人々が忠実なしもべとして主に奉仕するよう生活の向上をはかるのを怠っ

²⁰ Miller ed., *The American Puritans, Their Prose and Poetry*, p. 82. 訳は、大下尚一『ピューリタニズム』(研究社, 1976) p. 123による。

ていることである。その結果、ニュー・イングランドの社会は墮落という「病」に冒され、ウインスロップが標榜したような、各個人が主の忠実なしもべである共同体ではなくなったのだ。では、その「病」を治すための「救済法」として先人たちの人生を見て学ぶことをあげたが、具体的には彼らのどのような点を学ぶべきなのだろうか。これまでの議論から、「黄金時代」の人々と17世紀後半の人々との違いは、主の忠実なしもべとして生活の向上に励んでいたか否かであると考えられる。したがって、新しい神の国の指導者として人々を率先して神に仕えた人物を見習い、彼らと同じように一人一人が主の忠実なしもべとして振舞うことで、17世紀後半のニュー・イングランド社会を蝕んでいた墮落から救済されるというように、コットン・マザーは考えていたのではないだろうか。このように考えると、ニュー・イングランドが墮落してきたということは、すなわち、新しい神の国を創るにあたって必要不可欠な存在である主の忠実なしもべがいなくなってきたということを意味している。

それでは17世紀後半の人々が見習うべき「忠実なしもべ」とは、具体的にどのような人物だったのだろうか。第2章でも述べたように、ウインスロップが非常に信仰熱心であったため「模倣するに値する人物」と表現されていることから、特に信仰熱心な人物に対して「主の忠実なしもべ」という表現が用いられているのである。例えば、説教でより多くの人々に神の言葉を広めた人や、祈りに励んだ人、また貧しい人にすすんで施しを与えるような人など、聖書の教えに忠実な人物のことを指している。しかしながら、聖人のように称えられている彼らでも、回心体験をするまではさまざまなことについて思い悩んだり、真剣に祈りを捧げなかったり、あるいは世俗的な事柄に関心があったりと、ある意味では人間らしい一面もあったということが垣間見られる。

回心前は17世紀後半のニュー・イングランドの人々とおなじように世俗的な面を持っていた彼らが、敬虔なピューリタンに変身したのはなぜか。それは彼らが抱いた罪の意識と大いに関係があると考えられる。その一例として、『マグナリア・クリステイ・アメリカーナ』の第4巻の最後に取り上げられているナサニエル・マザー (Nathanael Mather) (1669-1688) について考察する。

ナサニエル・マザーは19歳という若さで病死した、コットン・マザーの実弟

である。コットン・マザーによれば、彼は幼い頃から非常に勤勉で、信仰心や悔い改め、回心に関する多くの本を読み、死の間際まで信仰に励んでいた²¹。それでもナサニエル・マザーの日記に見られるのは、自己分析と、分析の結果自分がいかに墮落しているかということに対する嘆きであった。というのも、実際彼も嫉妬や疑いの心を持っていたため、偽善者となることを恐れいつも罪の意識にさいなまれていたからである。

しかし、自分は神に対して偽善という罪を犯している存在であると悟ったため、日記で「私が以前悪魔のしもべだったときと同じくらいに活動的なキリストのしもべ」²²となるよう願っている。さらに別の部分では、「私の持つすべての物は、神のお役に立つべきであり、私の体の全器官や力は、神の栄光を得るために尽力すべきである。」²³と述べている。ここからわかることは、彼らは自分を罪深い存在だと思うことによって、より熱心に祈り、その結果神から救われたと感じ、自分を救ってくれた神に報いるために、またさらに一生懸命に神に仕えるようになるということである。そして、人々が敬虔な心から神に仕えることで神は栄光で満たされるのである。『マグナリア』には、このようなたくさんの「忠実なしもべ」の回心体験の様子が詳細に描かれている。彼らは罪の意識を感じ、悔い改めをした結果、主の忠実なしもべへと生まれ変わっている。

それでは、『マグナリア・クリスティ・アメリカーナ』で読者に主の忠実なしもべとなるべく、先人たちの人生を見習うよう主張しているコットン・マザー自身は、罪の意識とどのように向き合っていたのだろうか。一例として、彼が十代だったときの様子を見てみよう。彼は自分の父のようにすばらしい説教をおこない、有名な牧師になりたいと願っていた。しかし、幼い頃から吃音に悩まされ、人前でうまく話すことができなかった彼は、いつしかその原因が自分自身の持つプライドと怒りという2つの罪にあると感じるようになった。そのため長い間自責の念に駆られ、神に祈りを捧げていると、神が許しを与えてくれたという確かな感覚を得たという。その結果、彼は舌を自分の名声のためで

²¹ Mather, *Magnalia Christi Americana*, Book IV, p. 212.

²² *Ibid.*, p. 214.

²³ *Ibid.*, p. 212.

はなく神に仕えるために用いることで吃音を克服した²⁴。舌を神に仕えるために用いるということは、すなわち、神の言葉を人々に届けるために自分の舌を使うということである。彼は、かつて主に仕えることよりも自分が名声を得る方を優先していた。この時点ではコットン・マザーは主の忠実なしもべであるとは言えない。しかし、主よりも自分の利益を優先したことを罪と認め、そのような罪を犯した自分を許してくれた主に対し、心を入れ替えて精力的に自分自身を捧げるよう努める姿は、彼が『マグナリア』で描き出していた主の忠実なしもべと変わらぬものがある。

神の言葉を人々に伝えるために自分の舌を使うと誓ったコットン・マザーは、同時代の人々に対して「祈る時間をもてないものは、神により来世で断罪される」²⁵と説いていた。ここから考えられることは、17世紀も終わりの頃には、人々は祈ることさえしなくなっているということであり、新しい神の国という共同体に欠かせない存在である主の忠実なしもべがいなくなっているということの表れである。そしてこれまで論じたように「罪の意識と悔い改め」は、その共同体に欠かせない主の忠実なしもべになるために必要な要素である。それゆえコットン・マザーは世俗化する民衆に対し、先人たちの模倣をすることを強調し、声高に悔い改めを説いていたのだった。

おわりに

初代総督ウインスロップは、ニュー・イングランドにおける最初の精神的指導者と考えられている²⁶。彼の『キリスト教慈愛の雛形』では、ニュー・イングランドは「丘の上の町」であり、神のもとにある共同体として、個人がそれぞれの役割を果たすことが望ましいと述べられていた。よって、ニュー・イングランドのピューリタンは教会を中心としたひとつの共同体としてまとまること

²⁴ Silverman, *The Life and Times of Cotton Mather*, pp. 29-34.

²⁵ デイヴィッド・E・シャイ、小池和子訳、『シンプルライフ もうひとつのアメリカ精神史』（勁草書房、1987）p. 31.

²⁶ Emerson, *Puritanism in America, 1620-1750*, p. 43.

が彼らの重要な目的のひとつであった。そのため、牧師をはじめピューリタンの教えを厳格に守ろうとする人々は、教会を中心とした秩序ある共同体を保持しようとしたのである。

しかし社会は時代を経るに従って変化するものであり、「新しい神の国」として始まったニュー・イングランドにも同じことがあてはまる。さらに、イギリスだけでなくヨーロッパ各地から、ピューリタン以外のさまざまな移民、とくに宗教目的ではなく新大陸の豊富な自然資源を求める移民なども入ってきたことにより、社会は急激に変化する。しかし、そういった多様なものを排除してしまったら、ニュー・イングランド社会はひとつのまとまりとしての共同体とはもはや言えなくなってしまうのではないだろうか。

よって、コットン・マザーが『マグナリア・クリスティ・アメリカーナ』で、ウインスロップが宣言したような主の忠実なしもべによる共同体のよみがえりを切望していたのは、聖職者として教会の権威や人々の信仰心を復活させたいという思いのほかに、ひとつのまとまりとしての共同体の復活を求めていたからだと考えられないだろうか。つまり、彼はニュー・イングランドに暮らすさまざまな人々をひとつの共同体の構成員としてつなぐ役割を、ピューリタニズムに見出していたということである。したがってコットン・マザーが人々に対して、罪を悔い改めて主の忠実なしもべとなることを主張し続けていたのは、墮落した人物を共同体から締め出すためではなく、反対に、忠実なしもべとして共同体に留めておくためであったと考えることができる。また、排除してしまうということは、共同体としてのニュー・イングランドの意味を損なってしまうことにつながるともいえる。

以上のことは、教会員になるための厳しい条件や魔女狩りといった、「排他的」なイメージで語られることの多かった従来のピューリタン像とは異なるイメージである。しかし、彼がウインスロップの思想にあるような共同体を目標にしていた事や、『マグナリア』において中途契約をプロパガンダするような発言をしていた²⁷ことをあわせて考えれば、それほど不自然なことではないだろ

²⁷ Miller, *The New England Mind: from Colony to Province*, p. 103, 105, 108.

う。

この時代に起こったアメリカの社会的変化について、デイヴィッド・E・シャイは次のように述べている。

旧いイデオロギーと暮らしかたが、新しいものと並んで存続する。どんなに気づかれにくいにせよ、アメリカの経験を規定するにおいて、歴史の連続性が、歴史の変化とほとんど同じくらい影響力があったのだ。事実、この国の国民性にかたちをあたえたのは、この二つのあいだの絶えざる衝突だった。アメリカ人は、同時に、進歩と伝統に帰依してきた。このことはピューリタン倫理をながめるとき、とりわけ真実である。²⁸

ここで「アメリカの国民性にかたちを与えたのは進歩と伝統であり、アメリカ人はその両方に帰依してきた」と述べられているところから、最初に述べたようにコットン・マザーが「最初のアメリカ人」とされている理由がわかる。今まで論じてきたように、社会の変化に伴って共同体の構成員も変化してきた。彼は、植民地建設の要であった宗教を用いてこの共同体の変化（つまり世俗化）に抵抗しているように見えた。しかし一方で、宗教を利用することでこの共同体の変化（ここでは多様化）に対する適応法を提示していたとも考えられる。つまり、多様化という社会の変化にともなう共同体崩壊の危機に対応するため、多くの厳しい批判を受けながらも人々に共通の認識である宗教を用い、人々の信仰心が薄れていくことに警鐘をならしたのである。ゆえに、彼が「最初のアメリカ人」とされている理由がここにあり、アメリカという多文化社会に暮らす人間それぞれが、ひとつの共同体の一員であるという意識を最初に表した人物なのである。

²⁸ シャイ『シンプルライフ もうひとつのアメリカ精神史』 p. 30.